

市史だより

F u k u o k a

19

史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]

Spring / Summer 2014

TAKE FREE

市史だより Fukuoka 19 Spring/Summer 2014



特集

警弥郷をつくる

連載コラム「歴・史・万・華・鏡」 「福岡市史への歩み」
部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）

SF Column

福岡市史への歩み

volume
18

文＝田坂大蔵（福岡市博物館研究指導員）
Text: Daizo TASAKA

前回に引き続き「まんが 福岡市の歴史」の続編です。この「まんが」版という発案の契機になったものは何かと考えてみますと、思い当たったのは海外の事例でした。

昭和50年代、福岡市とフランスのボルドー市は、姉妹都市締結を目指した交流を開始しました。この取り組みが打ち上げ花火にならないよう、息長く市民の目に触れるような交流をということで、民間も含めたさまざまな交流が積み重ねられました。通常都市間の交流というと経済的交流を思い浮かべがちですが、このボルドー市との交流事業は、特に文化交流に力点を置いた取り組みがなされました。その目玉が、両市美術館同士の交流展の開催です。調印式にあわせて福岡市美術館の所蔵品を中心とした美術品をボルドー美術館にて出張展示し、翌年にはボルドー美術館の名品の数々を紹介する展覧会が、福岡市美術館で開催されることが決まりました。そして昭和57（1982）年11月8日、姉妹都市締結の調印式がボルドー市庁舎で行われ、福岡市から姉妹都市調印福岡市代表団団長であった当時の進藤一馬市長をはじめ、市役所や民間の関係者が多数渡仏し、ボルドー市の文化と風土に浸ったことでした。

その後、ボルドー市から贈られた印刷物のなかに、翻訳すると「ボルドーの歴史」という1冊がありました。ハードカバーで42頁の大型本です。これがなんと絵本仕立てになっており、いわば「まんが」本とも思えるものでした。

中身は、ボルドーの2000年に及ぶ歴史事象を1コマずつの絵にして解説を加えたもので、原文はフランス語ですが、絵をメインにしたことで、直接文字を読まずとも大まかな意味を汲み取ることができます。また、贈られたこの本には、解説文の日本語訳を印刷した紙が各頁に1枚ずつ挟んでありました。翻訳の精度なども含め、これが完璧な方法とはいきませんが、絵解きという手法で文章を最小限にしたことは、他言語版の本を作成する際の課題解消の一方策であることに気付かされます。日常的に多言語のなかで活動する欧州社会の成熟度に脱帽したことでした。

この「ボルドーの歴史」は、福岡市から調印式に参列した関係者の、ほぼ全員に配られました。つまり福岡市の幹部の多くがこの本に触れ、その有効性に気付き、アジアに向けて開かれた福岡市を考えた時、このような出版物を話題にしたかもしれないのです。「まんが 福岡市の歴史」という発想の背景には、このようなエピソードもありました。



▲ 寄贈された「ボルドーの歴史」（縦32.3cm×横30.8cm）

【参考文献】

鏡山猛「環渚住居論攷」（『九州考古学論攷』、吉川弘文館、1972年）●佐藤鉄太郎「博多警固所考」（『中村学園研究紀要』26号、1994年）●武谷水城「筑前国警固神社祭神弁」（『筑紫史談』27集、1922年）●那珂川町教育委員会編「郷土誌 那珂川」（福岡県筑紫郡那珂川町、1976年）●広田久雄「ふるさと絵史」（広田久雄、1984年）●広田久雄「警弥郷の歩み ふると絵史」（広田久雄、1984年）●福岡市教育委員会編「警弥郷3通路2—第3次調査の報告—」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第414集（福岡市教育委員会、1995年）●福岡市教育委員会編「弥永原遺跡5—第6次調査報告—」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第830集（福岡市教育委員会、2004年）●福岡市史編集委員会編「新修 福岡市史 民俗編—春夏秋冬・起居往来—」（福岡市、2012年）●福岡市南区民俗文化財保存会編「南区ふるさと」（福岡市南区民俗文化財保存会、1992年）●福岡市立日佐小学校創立百周年記念事業実行委員会記念誌委員会編「日佐小学校百年誌」（福岡市立日佐小学校創立百周年記念事業実行委員会、2001年）●正木嘉三郎「大宰府領の研究」（文獻出版、1991年）

【掲載】

広田久雄「ふるさと絵史」（広田久雄、1984年）▶P2・4 右上/P3 ●広田久雄「警弥郷の歩み ふると絵史」（広田久雄、1984年）▶P4 ⑦・⑧・⑨・⑩/P5 ⑬・⑭ ●広田久雄「警弥郷の歩み ふると絵史」（広田久雄、1984年）に加工▶P4 ⑫ ●矢野倉吉「古銭と紙幣」（全国社、1973年）▶P6 歴史万華鏡 図②

【資料所蔵】

市史編さん室▶表紙/P3 ④・⑤/P5 ⑫・下部写真/P8 市史への歩み・表紙の写真/福岡市博物館▶P6 歴史万華鏡 図①●福岡市埋蔵文化財センター▶P3 ①●福岡女学院▶P3 ②・③

【写真撮影】

株式会社ふるさとカンパニー▶表紙/P5 下部写真 右から2番目 ●穂積香織▶P6 お知らせ

【協力】

福永寛一郎氏 ●岩子嘉代子氏 ●日佐公民館 ●大長政敏氏 ●原賀重男氏 ●広田喜久雄氏 ●広田千津代氏 ●廣田正巳氏 ●福岡女学院資料室 ●株式会社ふるさとカンパニー ●弥永公民館 ●弥永小学校 ●弥永西公民館 ●弥永西校区自治協議会

表紙の写真 空から見る警弥郷



小学校や団地が足元にあり、新幹線を見下ろす——。新幹線の高架や弥永団地よりも高い建物がほとんどない警弥郷・弥永・柳瀬の一角では、あまり目にしにくい景色です。まるで鳥にでもなったかのようなこの写真、実はラジコンヘリによる空撮なのです。実際に空から町を見てみると、住宅街のど真ん中を新幹線が走り、その奥には法善寺の大きな屋根が、右手には警固神社や背振神社の社も見えます。撮影では弥永小学校の校庭を使用させていただきましたが、弥永小学校が福岡市と春日市の市境に位置していることから、最南端から福岡市を一望することができました。毎号、特集した地域の特徴を一目でお伝えするため、表紙撮影には苦労しますが、特に今回はちょっと変わった撮影で、珍しい1枚となりました。

編集・発行 福岡市博物館 市史編さん室
814-0001 福岡市早良区百道浜3-1-1 / TEL:092(845)5245 / FAX:092(845)5019

TAKE FREE

南区警弥郷・弥永・柳瀬の一部は、かつて上警固・弥永・東郷という三つの村でした。明治二十二(二八八九)年、三村は一つの大字「警弥郷」となり、那珂郡日佐村に属しました。その名は各村から一字ずつをとったものです。その後、昭和の土地改良事業および町界町名整理によって、旧上警固を警弥郷、旧弥永・東郷の地域を弥永・柳瀬と改め、今に至っています。田園、学園、団地、新幹線と、さまざまな風景を見せる「警弥郷」。その姿は、そこに住む人々が自らの未来を見据えてつくりあげたものでした。

● 奴国の衛星集落

昭和三十三年、福岡女学院の建設をきっかけに、発掘調査が始まりました(弥永原遺跡)。現在までに行われた調査では、狭い谷部を挟んだ東側の丘陵の尾根上などから、弥生時代中・後期のさまざまな形の墓が五〇基以上見つかっています。これらの墓には、鉄製の刀や斧、玉などが副葬されたものもありました。一方、西側の丘陵では、弥生時代後期の環溝や、古墳時代にかけて営まれた集落跡が確認され、めずらしいガラス勾玉の鑄型も見つかりました。また、この弥永原遺跡の西側にある警弥郷B遺跡では、縄文時代の終わりごろから水路が、

弥生時代には水田がつくられます。これらの遺跡の東側に隣接する春日丘陵には、「奴国」の中心とされる須玖岡本遺跡などの大規模な遺跡が展開しており、警弥郷・弥永の一带には、弥生時代、奴国の衛星集落があったと考えられています。

● 警固の由来

旧村名の一つ、上警固の名は、古代の「警固田」に由来するといわれています。奈良時代、大宰府は「警固式」というマニュアルに基づいて沿岸を警備していました。しかし、平安時代になると、警備にあたっていた防人や兵士たちの動員は社会の負担となり、停止されてしまいました。貞観十一(八六九)年に都へ綿を運ぶ船が新羅海賊に襲われると、大宰府は夷俘(蝦夷)や統領・選士に鴻臚館を警備させることで、再びその備えを強化しました。この組織は「警固所」とよばれました。

一方、大宰府が立ちゆかなくなった班田収授に見切りをつけ、独自に財源を確保しようとしたのもこのころです。貞観十五年、大宰府は班田収授に充てていた耕地のうち、全部で一〇〇町を人々に貸し付け、その賃料を警備費の一部に充てることを思いつきます。この耕地は「警固田」と名付

けられました(『日本三代実録』)。福岡市には上警固のほか、中央区や早良区にも警固の地名が残っていますが、警固所の所在地に関わる中央区の警固以外は、警固田に由来すると考えられています。その後の警固田は、大宰府の機構や役割が変わるなかで、大宰府の所領となっていったようです。古代から中世へと、大宰府管内の土地の仕組みを変えるきっかけの一つとなったのが、警固田でした。

● 三つの産土神

三つの旧村域には、今でも産土神がそれぞれ鎮座しています。歩いて廻れるほど近い三社ですが、一つ一つ見ていくと、かつて三つに分かれていた時代を私たちに語りかけてくれます。

東郷村は、旧大字警弥郷の一番南に位置していました。産土神は、現在弥永一丁目にある春日神社です。この春日神社は東郷村だけではなく、現那珂川町域の今光村の産土神でもありました(明治時代の調査に基づく『福岡県神社誌』は、氏子の数を東郷一七戸・今光四〇戸と記載)。これについては『筑前国続風土記拾遺』が、かつて東郷村が「下東郷」ともよばれたことをふまえながら、今光村のなかでも、昔「上東郷」とよばれていた



1 警弥郷B遺跡出土の手焙形くたあぶりかた土器(古墳時代前期)。内側で小さな火を焚いた痕跡が確認されていることから、火を使う祭祀に用いられたと考えられている。市内では那珂遺跡・雀居遺跡でも確認された 2 整地前の福岡女学院の校地 3 昭和40年撮影の福岡女学院周辺。昭和41年になると、写真左手に弥永団地の建設が始まる 4 警弥郷に残る水田。周囲は宅地化した。奥に見えるのは市営上警固住宅 5 警弥郷の虫追いごもりの様子。かつては8月に鉦や太鼓を鳴らしながら水田をまわり、虫封じの短冊を立てていた。しばらく途絶えていたが、平成23年から再び短冊が立てられるようになった。絵は『ふるさと絵史』より。著者の広田久雄氏は、自身の経験や古老の聞き書きを、手書きの文章と優しいタッチの絵でまとめ、警弥郷の生活を記録した。広田氏は警弥郷の土地改良などにも貢献した人物 6 【上】春日神社【中】背振神社【下】警固神社

本村地域が春日神社を産土神としていると、具体的に説明しています。今光村は東郷村のそばですので、古くは両者が密接に関係していたことがうかがえます。また、中世においてこの付近には、管崎宮領の「那珂東郷」があったことも、思い起こされます。なお昭和三十三年には、那珂川町今光五丁目に春日神社が分社されました。

春日神社から、脇を通るバス通りを北に数百メートル進むと、道路にはみ出さんばかりの大きな木と鳥居が見えてきます。弥永村の産土神、背振神社です。早良郡背振の神が勧請され、元禄年間(二六八八〜一七〇四)にはすでにその存在が知られていました。勧請の詳しい事情は分かっていませんが、天明四(一七八四)年に編さんの藩命を受けた『筑前国続風土記附録』は、当社の神職として坂井若狭の名を記しています。坂井は那珂・早良両郡の村々の産土社を奉祀した人物で、その担当地域には背振神社に関わる神社がいくつか見られます(現南区横手の宝満神社境内社の背振神社、『筑前国続風土記』記載の早良郡板屋村「北山の社」)。もしかすると、過去に坂井のようにこの地域を担当した神職が、勧請に関わっていたのかもしれない。

背振神社のそばの住宅街には、上警固村の産土神、警固神社があります。警固神社は中央区天神・早良区四箇にもあり、祭神は三社とも、八十柱津日神・神直日

神・大直日神で共通しています。あまり見かけない祭神ですが、黄泉の国から帰ってきた伊弉諾尊が禊をした際に生まれた神々です。災禍をもたらす八十柱津日神と、この災禍を吉事に転じる神直日神・大直日神は一セットで現れました。三神が警固の神となった理由に、神功皇后の新羅への渡航を警固したことを唱える説もありますが、神功皇后伝承の原点である『古事記』『日本書紀』にそのような話は見えませんが、詳しくはわかりません。しかしそういった説が唱えられるのも、海に面し外交と防衛の最前線にあった福岡の神様らしいといえるでしょう。

この警固神社の大事なお祭りの一つが、秋祭りです。おくんちや宮座ともよばれ、氏子たちが境内の注連縄を新しくし、豊穣を感謝する神事です。注連縄は、今でも上警固で採れたうるち米のワラを材料に、氏子たちが自ら作っています。この秋祭りに代表されるように、これまで氏子によって祀られてきた警固神社ですが、今では町内会を介し、氏子以外にも祭礼への参加をよびかけたり、氏子だけでなく、近隣の人々も定期的に境内を掃除するなど、地域の人々を結ぶ新たな役割も果たしています。

● 大火をのりこえて

ところで、警固神社の境内のなかで火結大神の祠の注連縄だけは、秋祭りではなく、

住民たちが自ら進めたまちづくりの歴史。

警弥郷をつくる

特集



アクセス

- 1 警固神社 (福岡市南区警弥郷3丁目6-20) 【西鉄バス】「警弥郷」停留所下車、徒歩約3分
- 2 背振神社 (福岡市南区弥永1丁目3-18) 【西鉄バス】「警弥郷」停留所下車、徒歩約1分
- 3 春日神社 (福岡市南区弥永1丁目21) 【西鉄バス】「弥永西小」停留所下車、徒歩約1分
- 4 福岡女学院 資料展示室 (福岡市南区日佐3丁目42-1/125周年記念館6階) 【西鉄バス】「福岡女学院」停留所下車

一月の鎮火祭のときに張り替えられます。鎮火祭はこの火結大神の祠の前で行われる神事で、いわゆる正月の「ほんげんぎよう（どんど焼き）」のように、正月飾りを境内で焼くというものです。しかし、他の地区の正月祭りとはその来歴がちよつと違いますが。そもそもこれは、昭和十八年の大火事の教訓を受け継ぐお祭りなのです。

昭和十八年一月三十日、警弥郷地区は大火に見舞われます。午後三時頃に上警固集落の西の端で発生した火災は、強風にあおられてまたたく間に上警固地区のほとんどを飲み込み、さらに隣接する弥永地区にまで広がりました。一帯は田畑に囲まれ、また集落内は狭く曲がりくねった道が多かったことから、駆けつけた消防車は立ち往生して火災に飲み込まれ炎上し、その他応援にきた消防車は火災現場に近寄ることすらできませんでした。

いずれの地区でも幸い死者は出なかったものの、そのほとんどが焼けてしまった上警固地区には、戦時下の物資不足という状況にもかかわらず、近隣から多くの援助物資が届けられ、復興の心強い支えとなりました。

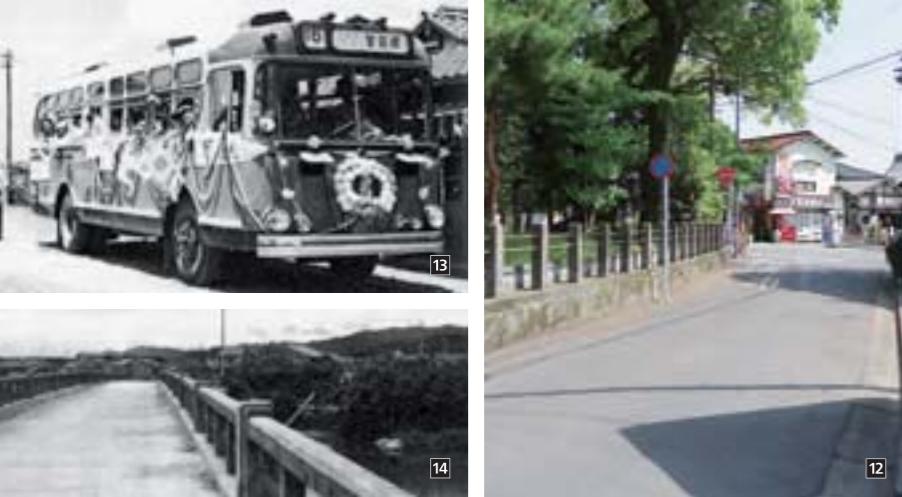
それからというものの、火事に対する教訓は、住民の心に深く刻まれました。各家で

は、夜間でも風呂の残り湯を消火用として残しておいたり、「いつ焼けてしまうか分からない」という理由から、その年に収穫した新米は備蓄米として貯蔵し、普段は古米を食べるという習慣が、しばらく残っていたといいます。大火から七〇年以上が経った今、住民の世代が替わり、直接的な火事の記憶が薄れつつあるなかで、警固神社では毎年火事が起こった一月三十日に鎮火祭を行い、その教訓を次の世代に引き継いでいこうとしています。

また、この大火事は上警固地区の人々に大きな変革をもたらしました。復興にあたっては、福岡県の勧めもあり、火災復興区画整理組合を結成して、ヨーロッパの村落をモデルに、幅四く六メートルの道路を巡らせ水路を整備し、さらに共同広場を設けて、万が一の場合でも、延焼を防ぎ避難を容易にするまちづくりを進めました。この活動を通して、上警固地区を中心に、お互いに助け合って、地域の問題に対処する習慣ができあがりました。このような地域の団結は、昭和二十九年に農地の効率的利用を目的として設立される農地交換分合委員会のほか、その後結成される警弥郷の開発に関する各組織の運営に受け継がれていきました。

●都市化の「波」のくる

警弥郷周辺は、那珂川河畔一帯に広がる農村地帯として、明治以降も近世以来の姿をとどめていましたが、人の往来が活発になってくると、道路の拡幅などの要望が強くなってきました。そこで大正から昭和初年にかけて、上日佐と警弥郷、そして警弥郷と老司方面を繋ぐ警弥郷橋の、それぞれを結ぶ二間道路（幅四メートル弱）が整備され、それまでほとんど畦道だった日佐村にも、



12 大正末期に建設された二間道路は、日佐村の各集落を繋ぎ、那珂川町安徳の辺りまで続いた。警弥郷付近では、背振神社横の道がその名残り 13 路線バス開通式の祝賀バス（昭和36年7月1日）。祝賀バスには、法善寺にあった警弥郷幼稚園の園児が乗り、天神まで往復した。この路線は現在でも当時とほぼ同じ道を行き来している 14 バス開通当時の警弥郷と老司を結ぶ警弥郷橋。警弥郷に延伸するまで路線バスは老司で折り返し運転をしていたため、警弥郷から町に出るにはまず老司まで行く必要があった。老司は商店・郵便局・医院などもあったため、警弥郷にとって重要な場所だった。一方で、老司と警弥郷の子どもたちは、遊び場であった那珂川を挟んで頻りにけんかもしていたという

ようやく近代的な道路が完成しました。昭和二十九年、福岡市は日佐村を合併し、三十年代以降も市街地を拡大していきました。そのような時流に反応し、上警固地区では発展期成会を組織、市営住宅と路線バスの誘致活動に乗り出したのです。その背景には、警弥郷橋付近に住宅が建設されれば、道路等のインフラも整備されて、地域の発展に繋がらうという見通しがありました。一方で、農業経営の不振による兼業化や、後継者不足といった問題から、農村としての将来像への不安も一部にはあったようです。

市営住宅は、もともと周辺の環境が良かったことに加え、警弥郷橋周辺の道路も拡張されたことから、二度にわたり誘致と建設に成功しました。その後、期成会はいよいよ懸案であった路線バス延伸のため、西日本鉄道と交渉を始めます。西日本鉄道側からは厳しい条件がいくつも課せられましたが、期成会はそれらを一ずつ解消して、昭和三十六年ついに路線の開通を実現したのでした。

このような流れは上警固地区にとどまらず、警弥郷の農地整理を目的として、土地改良と区画整理事業が計画されます。事業は、火災復興組合や発展期成会などと同様に、地元で組合を結成し、重機もあまりない環境ながら住民たち総出で工事に取り組みました。さらに、事業の第一の目的はもちろん農地の改良と整理でしたが、それまでの市営住宅誘致の成功もあり、最終的には住宅地への転用

を視野に進められました。こうした「先見の明」が大きく功を奏し、警弥郷はその後、本格的に農村から住宅地へと変わっていくことになりました。

区画整理事業が終わった直後の昭和四十四年十一月、南に隣接する那珂川町に新幹線の車両基地が設けられ、そこから博多まで、警弥郷を含む旧日佐村の各地区を縦断するように、引き込み線が設置されることが発表されました。日佐地区七町（五十川・井尻・横手・下日佐・上日佐・警弥郷・弥永）は対策協議会を結成し、当初は激しい反対運動を展開しましたが、時流には逆らいがたく、条件付きで建設を受け入れることになりました。

このとき地元から出された強い要望により、新幹線沿線の両側に各一メートル幅の側道が建設されました。警弥郷、弥永団地、さらに那珂川町の市街地によって交通量が増大していくなか、那珂川町から五十川までを貫く、より広く便の良い道路は地元にとって重要なものとなりました。さらに今日では、福岡都市高速環状線開通によって、都心部へのより一層スムーズなアクセスが可能となっています。

バス開通、そして新幹線の側道設置は、警弥郷に住む人々の働きによって実現したものです。警弥郷の近代化の歩みは、結果として、大火からの復興によって培われた地域の団結力によって支えられています。



7 8 9 昭和38年の土地区画整理の風景。事業は急ピッチで進められ、予定期間の半分ほどで完了した。写真の多くには女性が写っていることから、農家の主婦も作業の主力を担っていたようだ 10 昭和38年10月の警弥郷付近の空中写真。中央下の集落が警弥郷・弥永地区。集落の西側にある市分譲住宅の警弥郷団地と、北側に広がる整理された耕地が昭和38年の事業地区。それより少し前に完成した2つの市営住宅は、いわゆる集合住宅 11 手前にある整理以前の住宅群の家並みと、奥に見える新興住宅群のそれは対照的である



● 第10回福岡市史講演会「福岡城とは何か」を開催しました

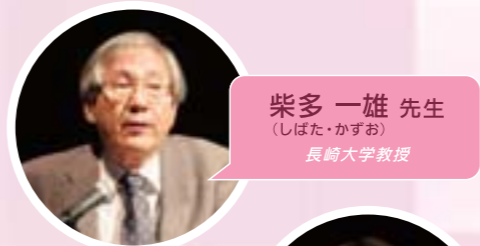
7月26日(土)、中央区赤坂の福岡市中央市民センターにて、3名の講師を迎え、第10回福岡市史講演会「福岡城とは何か」を開催しました。当日は35℃を超える暑さのなか、300名以上もの来場者があり、福岡城に対する関心の高さが見て取れる大変盛況な会となりました。

まず柴多一雄先生からは「近世の福岡城—御殿を中心に」と題し、江戸時代における福岡城の役割についてご報告いただきました。福岡城は、時代が下につれ、防御施設としてよりも政治・統治の拠点としての意味合いが強くなり、その中心は御殿であったとのことでした。

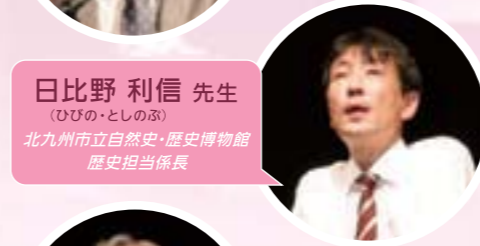
次に日比野利信先生には「近代の福岡城—城地の利用と記憶—」として、福岡城が近代以降「廃藩置県」「福岡大空襲」「建設と保存のせめぎ合い」という三つの試練を乗り越え、今日に至っていることをご報告いただきました。加えて、福岡市の持つアイデンティティーや歴史意識についてのお話もありました。

最後に羽賀祥二先生からは「近代の都市形成と城郭」と題し、福岡以外の城郭を持つ都市として、名古屋や熊本などを例にご講演いただきました。そのなかで、近代の都市形成や都市改造は、それぞれの土地の歴史を踏まえて行われるものであり、それゆえにその象徴でもある城は地域のアイデンティティーの拠り所で、他地域との差別化をはかるうえでも重要な位置を占めるとお話いただきました。

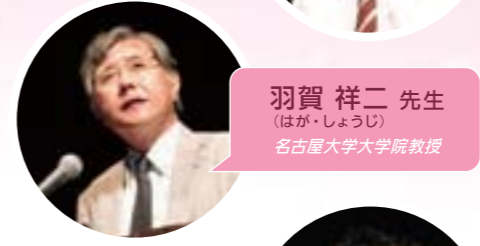
これらの講演を受けて、司会の中野等先生が、地域の歴史が都市を形づくる際の指針になるとまとめられたように、福岡城を知ること、福岡市の将来像をも考えるきっかけとなった講演会でした。



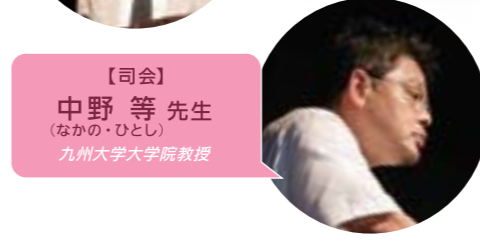
柴多 一雄 先生
(しばた・かずお)
長崎大学教授



日比野 利信 先生
(ひびの・としのぶ)
北九州市立自然史・歴史博物館
歴史担当係長



羽賀 祥二 先生
(はが・しょうじ)
名古屋大学大学院教授



【司会】
中野 等 先生
(なかの・ひとし)
九州大学大学院教授

東公園亀山上皇銅像の当初計画は騎馬武者像であった

明治四(一八七二)年十一月に右大臣倉具視ら政府要人一行は、欧米先進諸国視察の旅に出発した。その随員の中に安場保和がいた。安場は偉人のモニュメントを広場や公園に建立して顕彰し、今後の示唆を得ることが先進国で行われていることを目の当たりにした。安場は明治十九年二月に福岡県令(知事)になったが、その年の八月に長崎で、上陸した清国北洋艦隊水兵による騒乱事件が起こった。巡査が死亡したこともあって福岡警察署長湯地文雄は、元寇を想起し、護国思想高揚のために記念碑建設を発起した。安場も賛同し発起人の一人となり、建設費を募集するための広告もつくられた。明治二十二年七月刊行の「元寇記念碑建設義捐金募集広告」の完成予想図には、高さ約三五メートルの石柱の上に高さ一・五メートルの騎馬武者の像が描かれている。この騎馬武者像は旧国立銀行券の一元紙幣に描かれた元寇の戦闘図に基づく。旧国立銀行券はアメリカで印刷されており、そういえば米国人がデザインしたこの図は、米大統領官邸北側の公園に建つ第七代大統領ジャクソンの騎馬像を想わせる。明治二十三年には湯地は官職を辞して募金活動に専念することにした。ところが明治二十五年の第二回衆議院総選挙で、安場知事は政府系候補者が勝利するように大々的な選挙干渉を行い、なんとその活動資金に湯地が集めた寄付金全部を使ってしまった。後の河嶋醇知事は同じく元寇記念碑として日蓮上人銅像を建てようとしていた日蓮宗僧佐野前助に、日蓮を迫害した北条時宗の騎馬像でなく、護国祈願をした亀山上皇の銅像にすることによって協力を求めることにした。明治三十五年に博多出身の彫刻家山崎朝雲による原型(菅崎宮に安置されている木造像)が完成し、佐賀市の谷口鉄工場にて鑄造されて、明治三十七年十二月二十五日に除幕式を迎えた。ちなみに日蓮上人銅像は前月八日に除幕式が行われている。



▲図①: 元寇記念碑建設義捐金募集広告(部分)
募集広告の趣意書に掲載された完成予想図で、石柱の上に立つ騎馬武者像



▲図②: 旧国立銀行券の1円券
(明治6年8月23日発行)
裏面には、広告(図①)の図案の下地となった元寇戦闘図が描かれている

！ 考古

平成三十一年刊行予定の『資料編考古2』に掲載する遺跡の選定を行っています。この巻では、各時代の行政単位だけではなく、河川や丘陵、平野などの自然地形をふまえ、市域を大きく東西に分けたなかから東部地域に所在する遺跡について取り上げます。旧石器時代から近世に至るそれぞれの時代の特徴的、代表的な遺跡について、一つ一つ検討し選んでいくのですが、その過程で明らかとなった福岡の考古学史についても、遺跡の情報とあわせて皆さんにご紹介できればと考えています。

！ 古代

『資料編 古代』の編集のために、古文書の調査を続けています。先日は京都大学総合博物館のご厚意により、同館所蔵の古文書を熟覧することができました。毎回、古文書の所蔵者には無理をお願いするばかりで心苦しいのですが、どこも快く閲覧をお許し下さいます。改めまして、心より感謝申し上げます。これまで調査した古文書は、所蔵者にお願ひし、できる限り写真や紙焼きを入手するようにしています。これらは、文字の校訂だけではなく、今後もながく福岡市域に関する研究に役に立つものと思っています。

！ 中世

平成三十一年刊行予定の『資料編中世3』の編集作業を開始しました。これまでに編集した『資料編中世1』と『中世2』では、福岡市に関係する古文書を中心として資料を収集しましたが、今回は古文書以外の資料を中心に収集を行う予定です。日記などの古記録や、軍記物や和歌といった文学作品なども収録の対象とする予定です。資料の性格が多岐にわたるため、どこまでを収録対象とするのかこれから議論が必要となります。まだ作業は始まったばかりですが、前巻までとは少し違った視点から、中世の福岡市域について検討できるものにと考えています。

！ 近世

平成二十九年刊行予定の『資料編近世3』は町と寺社の資料を掲載する方向で検討が始まりました。一口に町と寺社といっても、町は大きく福岡と博多に分かれ、寺社も寺と神社に分けられます。寺はさらに多くの宗派に分かれて……。こう書くと一体どんな資料を選んで一冊の本にまとめたらいのか、刊行することが途方もないことのように感じます。ですが残された時間のなかでまずは検討を重ね、編集の方針を決めます。その一方で資料の調査・収集を進め、さらに収集した資料も検討の材料に加えながら掲載資料を確定する。作業は地道ですが、着実に進めるしかありません。これからまた長い道のりが始まります。

！ 近現代

『資料編 近現代2』の編集が進んでいます。明治期の福岡と周辺地域で結成された、政社・政党・地域団体の動向や選挙などに関連する資料を掲載する予定です。自由民権運動を経て、明治二十三(一八九〇)年の議会開設が間近になってくると、選挙をにらんで、地元の名士たちが離合集散を繰り返すようになります。有志たちが集まって団体を立ち上げ、その様子はたびたび地元の新聞に取り上げられます。それら新聞記事と、今日残っている政社の規約や関係者の書簡などの資料を収録して、自治体を取り扱う対象としては珍しい「政治の世界」を、古文書と新聞によって明らかにしていきたいと考えています。

！ 民俗

平成二十七年刊行予定の『民俗編二ひとと人々』の編集作業を続けています。原稿を集積し、目次を組み立てるといいう作業が終わり、一冊の本としての全体像が見えてきました。四部構成で、さまざまな地域の特色や市民の方々の暮らしを取り上げるバラエティーに富んだ内容になっています。今後は内容の推敲はもちろん、誌面についても検討し、地図や写真を盛り込むなど、読み物としてよりわかりやすいものになるよう、創意工夫を重ねていきます。